

F. 報告書作成の苦勞

田中 文恵

1. 報告書作成までの苦勞

今回の調査は、実習の授業の中で調査の方法についてや社会学の文献を読み知識を得ながら「義肢・義足のエスノメソドロジー」というテーマを設定し調査を行ってきた。前期にはY義肢への訪問や、後のZ園での撮影のための下見を兼ねてZ園を訪問し、調査対象者の方々へのインタビューを行った。そして夏季休業中に分析を進められるように、夏季休業に入る前にZ園での撮影を行った。撮影当日、撮影技術の面で多少のトラブルはあったが1日かけてじっくりと撮影を行い、貴重なデータをとることができた。そのデータを持ち帰り、各々に個別のテーマ設定をし、分析を進めていった。

実際に調査に入る前に大まかな調査予定を立て、その都度修正を加えながら分析を進めていき、多少遅れ気味であったが何とか順調に進んでいたように感じたのだが、報告書作成の時期が近づき問題点が発生した。各々が分析を進めていたのだが、それに伴うデータが不足していてもう一度Z園を訪問し撮影を行わなければならなくなった。その問題点に気付いたのが12月に入ってからのもので、報告書作成まであまり期間がなく慌しく撮影を行うことになった。そういったこともあって、先に挙げた夏の調査での反省点を活かすことができず、12月の調査でも技術的な失敗があり、必要なデータを上手く撮影することができなかった。また、Z園との事前の確認に不備があったために、私の調査対象者である方が12月の撮影時に病氣療養中で自宅に戻っていらっしゃるということをZ園に訪問してから職員の方に伺い、撮影を行いたいのには被写体がないという事態が起こってしまった。

これらの問題点については、事前にしっかりと予定を立て余裕を持って行うことで防げた事態だと思う。各々の分析を進めていく中で、その過程を持ち寄り、他のメンバー全員で自分の分析の進み具合を報告しあったり話し合ったりする時間をもう少し確保し、それにあわせてその都度詳細な予定を立てていくことが重要であると感じた。そうすれば、報告書作成直前になってのデータ不足の問題も回避でき、もう一度撮影を行うにしても、連絡の不備や技術面での失敗も防ぐことができたであろう。

2. 報告書作成での苦勞

ここでは、撮影が無事終了しデータを基に各々個別のテーマを設定し研究を行うという段階での苦勞について記述したいと思う。この調査では、まず調査対象者の一日に密着し撮影を行い、そのデータから自分が注目する点を取り上げそれについて詳しく分析を行うという手法で行っている。そのようなことから、各々の設定した取り上げた注目点が社会的なものであるのか、または設定したテーマに合致しているのかなどが十分判断できずテーマを何度も変更したりということがあった。今回のこの調査報告書全体の調査目的は「義肢・装具のエスノメソドロジー」というテーマのもとに明確になっていたのだが、個別のテーマ設定にあたっては先述のような調査の手法であるため、撮影の段階では個別のテーマに対する調査目的が明確ではなかったと言える。我々実習生がそのような手法に不慣れであったため、報告書作成にあたっての難関となった。

次に、テーマを設定し各々が分析を進めていく中で考えや執筆が行き詰ってしまうとい

う問題があった。ここからは個人での作業が中心となり、どうしても考えが堂々巡りになってしまい何をこの調査報告書で訴えたいのかということが分からなくなってしまうということが起きた。授業中にもお互いの研究過程を持ち寄り、報告し話し合うという時間を確保し、合宿も行ったが、もう少しこういった時間を増やし相談を重ねることで改善できる点であると思う。加えて、班に別れ、班ごとにそういった時間を持つことも有効である。今回の調査でも 2 つの班をつくり調査していたのだが、それが上手く機能している班とそうでない班とがあった。上手く機能しなかった班では、個別のテーマ設定での研究ということもあり、自身の研究で手一杯になってしまい班内での話し合いの時間を持つことがあまりできなかった。他者の客観的な意見を聞くことができる有効的な場であるので、できるだけ班活動の時間をつくり活用すべきであったと思う。

全体を通して、個人だけで研究を進めるのではなく、他者との報告や話し合い、相談の場や時間をできるだけ作り、それを活用するということが大切であると言える。